本よみうり堂

●コミック館

本の価格は税抜きです

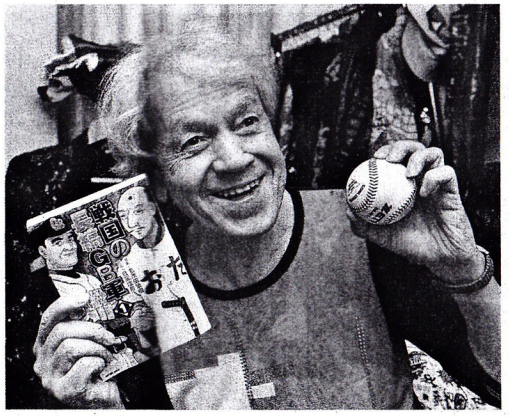
志茂田景樹さん原案「戦国の長縞GB軍」

巨人軍が信長軍と対戦

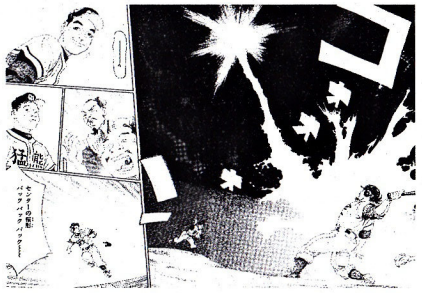
直木賞作家・志茂田景樹さん(74)の〝幻の奇書〟を原案にしたマンガ『戦国の長縞GB軍』の単行本1巻が、リイド社から刊行された。長嶋茂雄監督率いる巨人軍をモデルにした球団がタイムスリップし、織田信長軍と野球で対戦する奇想天外な物語。志茂田さんに話を聞いた。（増田真郷）

原案は、1995年に実業之日本社から出版された小説『戦国の長嶋巨人軍』（品切れ）。設定の奇抜さから「奇書、怪書と言われた」（志茂田さん）作品に、時代劇マンガ専門誌「コミック乱」が注目。マンガ家・日高建男さんの作画で昨夏から連載が始まった。現在は第1部が終了し、秋から第2部が始まる予定。

小説は実名だが、マンガでは長嶋監督が「長縞」、巨人が「東京グレートベアーズ（GB軍）」などとされている。だが、絵は本人そっくりなので、誰がモデルかわかるようになっている。



「今の球界で戦国っぽいのはDeNAの中畑監督かな」＝清水敏明撮影



巨人・槙原がモデルの巻藁投手から本塁打を放つ柴田勝家。まさに〝真剣勝負〟だ（『戦国の長縞GB軍』より）©日高建男／志茂田景樹

物語は、95年2月にGB軍がトレーニングの一環で自衛隊の訓練に参加する場面から始まる。地震で戦車とともに時空を超え、1560年の桶狭間（愛知県）に来てしまった一行は、信長と出会う。

志茂田さんは、「才能と情熱があれば、誰が天下を取ってもおかしくなかったのが戦国時代。一つのミスが命取りになるところなど、野球と共通する要素もある」と指摘。「新しもの好きの信長なら、野球にも興味を持つはず」と語る。

小説に描いたのは1994年に日本一となった直後の巨人。同年10月8日、巨人はセ・リーグ同率首位で並んだ中日と、ナゴヤ球場でシーズン最終戦を迎えた。「勝った方が優勝」という試合は、両軍の主力がけがで退く激闘となり、6−3で巨人が勝った。

尾張（愛知県西部）の織田軍団は、名古屋に本拠を置く中日を連想させる。直接「10・8」を描いたわけではないが、志茂田さんの頭の中にはこの激戦のイメージがあったという。「今はデータ野球が当たり前になったが、あの頃はまだ、侍の雰囲気があった」。落合、原、松井が打線の中軸を担い、槙原、斎藤、桑田の3本柱がマウンドに君臨した時代を懐かしむ。

工夫したのは、織田軍の先発メンバー。抜け目がない木下藤吉郎（後の豊臣秀吉）が2番、豪傑・柴田勝家は4番など、武将のイメージに合わせて編成。直球勝負を挑む槙原から勝家が本塁打を放つストーリーなど、「いかにもありそうな」話に仕立てられている。

小説は、巨人軍が現代に帰ることなく、未完のまま終了。その後のアイデアは日高さんに話しているが、「原案にとらわれ過ぎず、自由に発想してほしい」と、エールを送る。

時を超えてよみがえった怪作の改作。〝ゲームセット〟まで、目が離せない。

◇

作品に描かれた当時の巨人を詳しく知りたいなら、昨年刊行された元報知新聞記者・鷲田康さんのノンフィクション『10・8 巨人VS中日 史上最高の決戦』（文芸春秋）がオススメ。試合経過とともに、選手や関係者の胸中が明かされている。「国民的行事」と呼ばれた一戦が、まさに〝合戦〟だったと実感できる。